

Topics I 九州

九州における地域公共交通づくりの実践とこれから —交通政策基本法の制定をふまえて—

大井 尚司 大分大学経済学部経営システム学科

この40年間、生活・労働環境などの変化により自家用車の利用は増えている一方、公共交通の利用者は減少しており、バス・鉄道・法人タクシーともに厳しい経営状況が続いている。また近年は、労働力や投資資金など、交通事業に関する「リソース」が不足し、事業者の撤退も相次いでいる状況にある。さらに自治体においても人口減少や少子高齢化の影響で、財政的支援も限界に達している。このように、まち・おでかけ・しくみの「常識」が変化しているといえる。将来の生活手段を確保する視点からも、地域公共交通を考える必要性が生じていると考えられる。

こうした情勢の中、交通政策基本法の施行や、これを受けた都市再生特別措置法の改正により、制度上も、地域の足を、戦略的にみんなで作らなければならない時代となってきた。また、生活圏単位の発想や立地適正化計画との連動など、自治体自らが地域公共交通のマスタープラン(青写真)を描く必要があり、自治体や事業者の意識改革が必要である。

九州各所での交通計画の実践の中で、地域公共交通における課題解決のための学びの場が十分でないことに着目して、行政・交通事業者・コンサルタント・研究者といった関係者間のネットワーク構築を趣旨とした勉強会「Qサポネット」を有志

で立ち上げ運営している。本取り組みは、2010年7月から毎年2～4回程度のペースで、交通および関連するまちづくり・社会経済事情などに関する勉強会を行っており、2015年度末までに15回開催してきた。毎回60～80名程度、様々な立場の方に参加いただいております。延べ参加者数は800人を超えている。このような取り組みが評価され、建設コンサルタンツ協会九州支部のCPDプログラムに継続的に認定されているほか、近年では国土交通省九州運輸局や九州各県とも連携して、自治体職員向けの講習の運営支援を行っている。

【Qサポネット公式ブログ】<http://qsuppo-net.blogspot.com>

【お問い合わせ】Email:qsuppo.net@gmail.com, Fax 097-554-7697



勉強会の様子

Project I 九州

中山間地域におけるフットパスの取り組み

柴田 祐 熊本県立大学環境共生学部

近年、中山間地域における地域づくりの手法としてフットパスに取り組む地域が全国的な広がりを見せている。日本フットパス協会は、フットパスを、「森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径【Path】」と説明しているが、筆者が把握しているだけでも全国で123市町村、コースは500以上にのぼる。九州での取り組みも盛んで、例えば、熊本県美里町では、美里フットパス協会が中心となって町内に15コースを整備し、いわゆる「美里方式」と呼ばれる独自のフットパスを展開している。

フットパスは、外部の人が地域内を自由に歩くことを想定しているため、地域住民の理解が不可欠である。美里方式では、地域住民の協力のもと、地域外の人が自由に歩いてよい道や見所をピックアップしながらフットパスコースを作っていくが、その過程で、地域住民自身の地域に対する理解が深まり、愛着や誇りの醸成につながっている。さらに、地域外の人が自由に地域内を歩くことで、挨拶や声かけだけでなく、コース沿いの草刈などを地域の住民が自発的に

行うようになるなど、フットパスの取り組みに無理なく、自然に巻き込まれるという現象が生じている。もちろん、地域外の人との交流も地域住民にとって、フットパスに参加し続ける大きなモチベーションとなっている。

筆者も現在、熊本県菊池市で住民によるフットパスコース作りの支援を行っているが、地域づくりにおいて、住民の参加が目的化してしまう場合があるなかで、フットパスを通じた地域づくりは、地域住民が無理なく参加することができ、そして何より楽しいという点において、大きな可能性があることを実感している。



何気ない普通の田舎道を歩くのが醍醐味



地域で普段食べているものでおもてなし